



巻頭言

威ありて 猛からず

森下 はるみ

M先生のこと

幼児教育の雑誌に「へらい」はふさわしくないし、ちょっとためらったが、やっぱりM先生のことから話したい。上京のたびに「今度こそ」といつていた友人と三人、この七月末、やっとM先生をお訪ねできた。今は、ご自宅でなく郊外の施設だとのこと、ひよっとしたらスタッフ役で入所されたのでは、と一方でわき出る懸念をうちけしながらの往路だった。職員に案内され近づいた瘦身白頭の車椅子のお方、一瞬の間があつて、やがて水底から浮き出るように現れたその顔は、まぎれもないM先生だった。

丹沢の山並みをバックにした見晴らしのいいホールで、ほとんど一方的にせっかちに



三人がそれぞれ語りかけた。これまでの先生像が、突如、過去のものになってゆくのをふりきろうとでもするかのように……。それに對し先生は終始聞き役で、ときに「なにもかも忘れました」とか、「幼稚園は麴町だった」とか、か細い声でポツリとつぶやかれるだけ。そして、ふと気がつくのと、いつのまにか我々も、先生の醸す一種の静謐な空気の中につつまこまれていた。

人生は、というよりその最終コースは自分では選べない。あの精神貴族みたいな潔癖さの水気がぬけ、その分、気難しいが清明・透徹な老年期をお迎えだろうなどと勝手に予想していた。目の前の姿は、それとは異なる「古い」を静かに受け入れている。しかし不思議に、先生らしいある種の品性というか尊厳さだけは変わらない。「あなたのトラは、威ありて 猛からず」と、寅年に画いた年賀状に對する日先生からの印象を、めずらしく嬉しそうに語られたことがある。今の先生の「威」はもう少しマイルドだ。年とともに身につけたもろもろを、「その時」が来たら、一枚ずつ脱ぎすてて、核となるその人らしさに帰ってゆくといわれる。とすれば先生の品性の萌芽は幼年期にちがいないと、その自然体の、「ことば」ではない座り姿勢やお茶の飲み方一つ一つから感じとっていた。

伝統芸能のこと

自然体にも二種類ある。一つは生まれたままのもの、いま一つは見習い、繰り返し



て、やがてそれが無意識にできる段階のものである。生まれつきの姿・振る舞いが許容され魅力的なのは、野生動物か、人ならせいぜい乳児期までではなからうか。野生動物の場合は、その行動すべてが生命保持とかわるので無駄は許されない。人の場合は、その動作の選択肢が広い分だけ、乳児期を過ぎると、それぞれの社会や文化に受け入れられてきた所作や行動様式の「原型」を身につけてゆく。

神楽の「わざ」の伝承について、指導者の言葉をI氏が紹介していた。まず「かたち」を覚えることからはじめ、それを続けていくとやがてからだが「あまってくる」段階があり、この段階になってはじめて「あや」のついた「へわざ」を習得することができるといふ（生田、「からだがあまる」、比較舞踊学会報、14）。立ち居振る舞いについて、この「あまってくる」身体のもとに、三つ子の魂といえるような原型が、自然体として身につくのではなからうか。

話は変わるが、「ようこそ 先輩」という好きなテレビ番組がある。先輩であるにわか先生が、まず何でもいから自由に話すとか、声をだすとか、動くことを求めると、子ども達は例外なくとまどった表情をうかべる。すでに身体が「あまっている」先輩も、それを見てしばしとまどい、そこはさすが、すぐにある「枠組」や「方法」を提示して番組は無事に進行することが多い。導入されてかなりの年月を経たにも関わらず、いまだに普遍速度の低い「創作舞踊」なども、「個性を尊重し、自由でのびのび」という旗印が、逆に不自由さと呼んでいるのではなからうか。エキスパートといわれる教師



はみな、緩急・緊解自在の籬をもつて子どもに向かい合っているが、このたがはそう簡単に手にはいらぬ「わざ」そのものだ。

舞台上演じられる伝統芸能は、ふつう演者と観客が分離しているし、演目は観客がよく知っているものからなる。見る側の楽しみは、目新しさよりは、よく知っているへすじやへ振りを、当日の役者がどう演じるかにある。ところが演じ方を習うとなると、動きのリズム・テンポ、扇のあつかい等々、身体づかいのすべてが、まったく初めての体験になってくる。しかし例外なく、習ってみて、観客としての目も深まったという。

ところで、舞台でのお辞儀、立ち・座り、歩行などの一挙手一投足は、日本文化のなかで、年月をかけて磨かれ精選されてきたもの、原型は日常生活の動作様式に基づくものだ。昨今、やと伝統芸能の教育への導入が始まろうとしているが、このことは、日常生活の振る舞いの再構成にもつながるのではなからうか。当方、電車のなかで、品位ある振る舞いの人には、心の中で賛辞をおくったり、一方へ居きたなさには、「いじわるばあさん」を実践したりしている。しかし、やがて自分がへその時へになったら、M先生とはことなり、「いじわる」の核だけが、梅干の種のように残るのではないかと、ちよつとばかり心配したりしている。

(比較舞踊学会会長)